

地域とともにある学校づくり

～コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進～

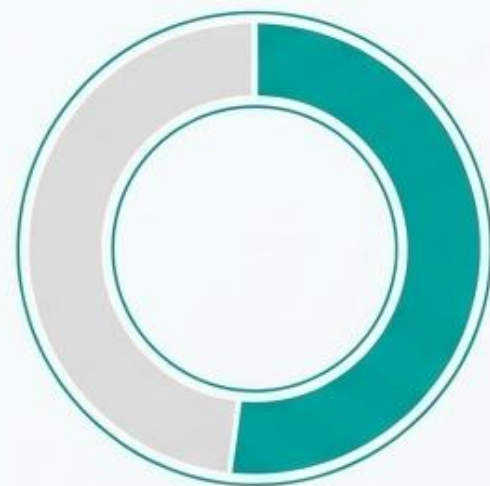
コミュニティ・スクールマイスター
玉利 勇二

客観データが示す全国の到達点と「一体化」の波

64.9%

全国公立学校
CS導入率 (22,009校突破)

メッセージ：CS設置は特別なお祝いごとではなく、
全教職員が共有すべき「標準インフラ」。



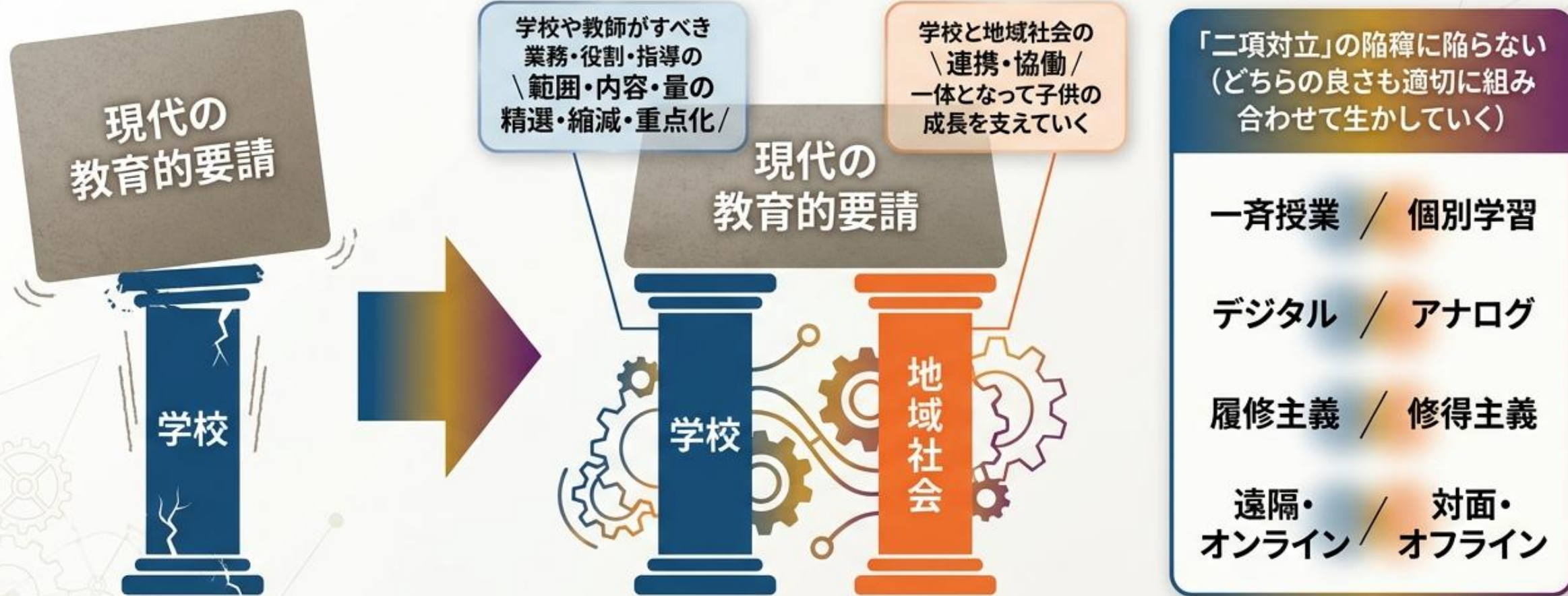
51.6%

CS×協働本部
一体的整備率

メッセージ：過半数の学校が両方を連動。協議だけ
(13.4%)、支援活動だけ (15.4%) では不十分。
「話し合った方針がすぐ実践につながる」形が標準。

変化する社会と学校の「限界」を乗り越える

予測困難な社会と多様化する子供たちのニーズに対応するためには、
学校単独の努力だけでは限界があります。



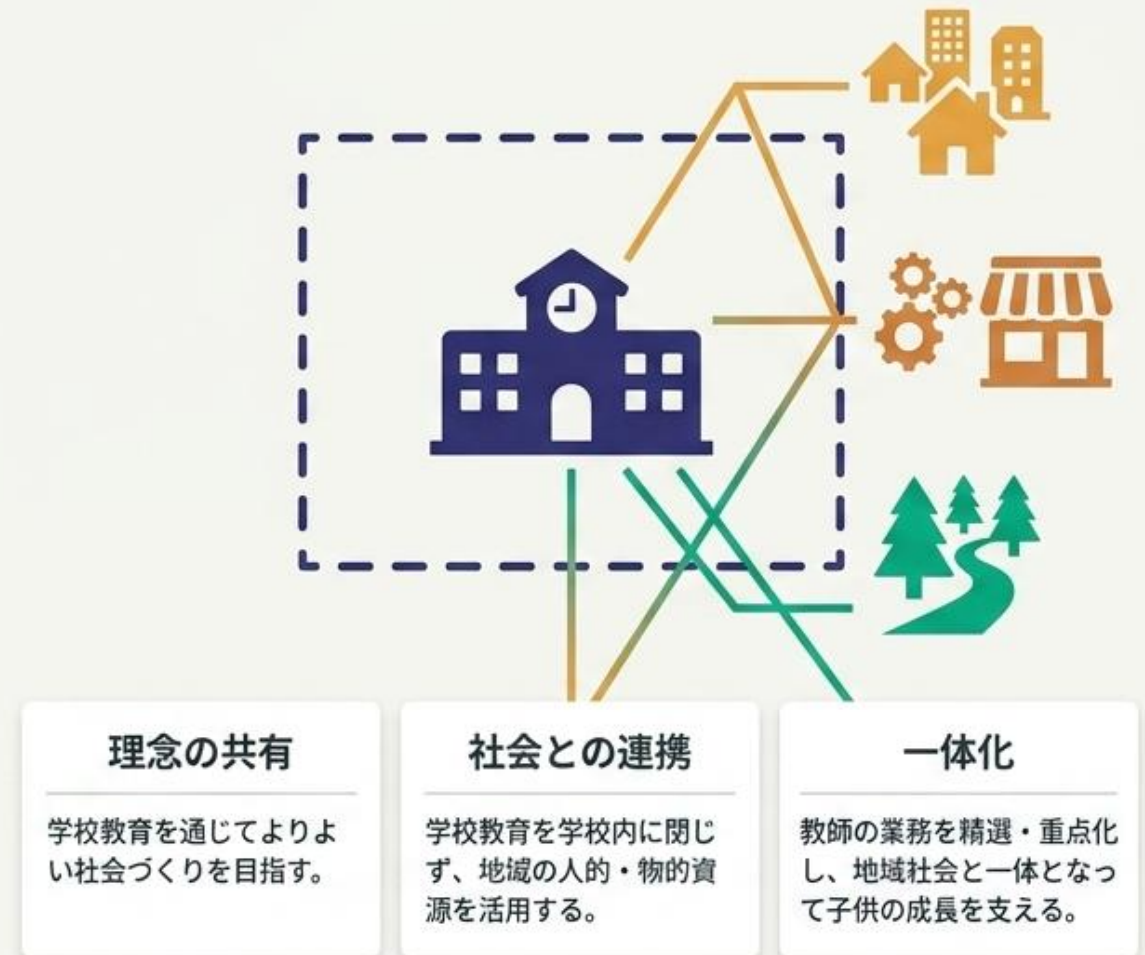
予測困難な時代に求められる「社会に開かれた教育課程」

過去の陥穽 (Past)



学校内に閉じた教育 / 二項対立の陥穽

令和の教育 (Future)



「地域の人に手伝ってもらっているから、うちもCS？」というよくある誤解 というよくある誤解



活動の「羅列」だけでは、真のコミュニティ・スクール（CS）とは呼べません。
単なる「学校応援団」にとどまっている可能性があります。

大切なのは「どんな活動か」ではなく、「どう進めるか（ガバナンス）」

単なる学校応援団	真のコミュニティ・スクール
起点：学校からの「お手伝い」要請	 起点：教育目標の共通理解と課題の共有
目標：活動そのものの実施	 目標：子供の成長と学校運営の改善
関係性：依存（学校が主体、地域は客体）	 関係性：対等なパートナーシップ （ガバナンスの共有）



“地域と学校との間で、子供や学校をめぐる教育的な課題や教育目標を共有した上で、必要となる教育活動を協議したり、学校運営の評価・改善をしたりする”

コミュニティ・スクールとは「熟議」の組織が設置された学校

学校運営協議会（エンジン）

目標の協議

学校と地域住民・保護者とが目標について協議する。

達成方法の協議

教育課程の編成をはじめ、どう目標を達成するかを協議する。

資源活用の協議

地域社会からの資源・支援の活用について協議する。

法律に基づき設置される組織が、学校と地域のビジョンをすり合わせるエンジンとなります。

「意見を聞く場」から「責任を共有する機関」への決定的進化

	学校評議員	コミュニティ・スクール
根拠	任意設置	地教行法第47条の5
位置づけ	諮問機関	合議制機関
役割	個人の意見を述べる	学校運営方針の「承認」と参画
委員の立場	第三者的立場	非常勤の特別職地方公務員 (当事者として責任を共有)

「承認」の概念を変える。

OK



(第三者的な
評価・承認)

Let's!

(当事者として
一緒にやろう!)



制度化されたCSがもたらす「3つの根本的価値」

自立性・対等性：協議会が権限を有するため、学校だけに任せず、対等な立場で多様な意見を反映できる。



当事者性：十分な権限により当事者意識が高まり、協議が活性化する。決定に責任が伴う。

持続性：教職員の異動に左右されず、永続的かつ安定した学校運営の仕組みを制度的に保証する。

ガバナンスを担保する「学校運営協議会」の3つの権限



両輪を回す：「熟議」と「協働」の一体的推進モデル

学校運営協議会（CS）：
目標・ビジョンの共有，
熟議

マネジメント：
校長のリーダーシップ

地域学校協働活動：
協働，連携・分担

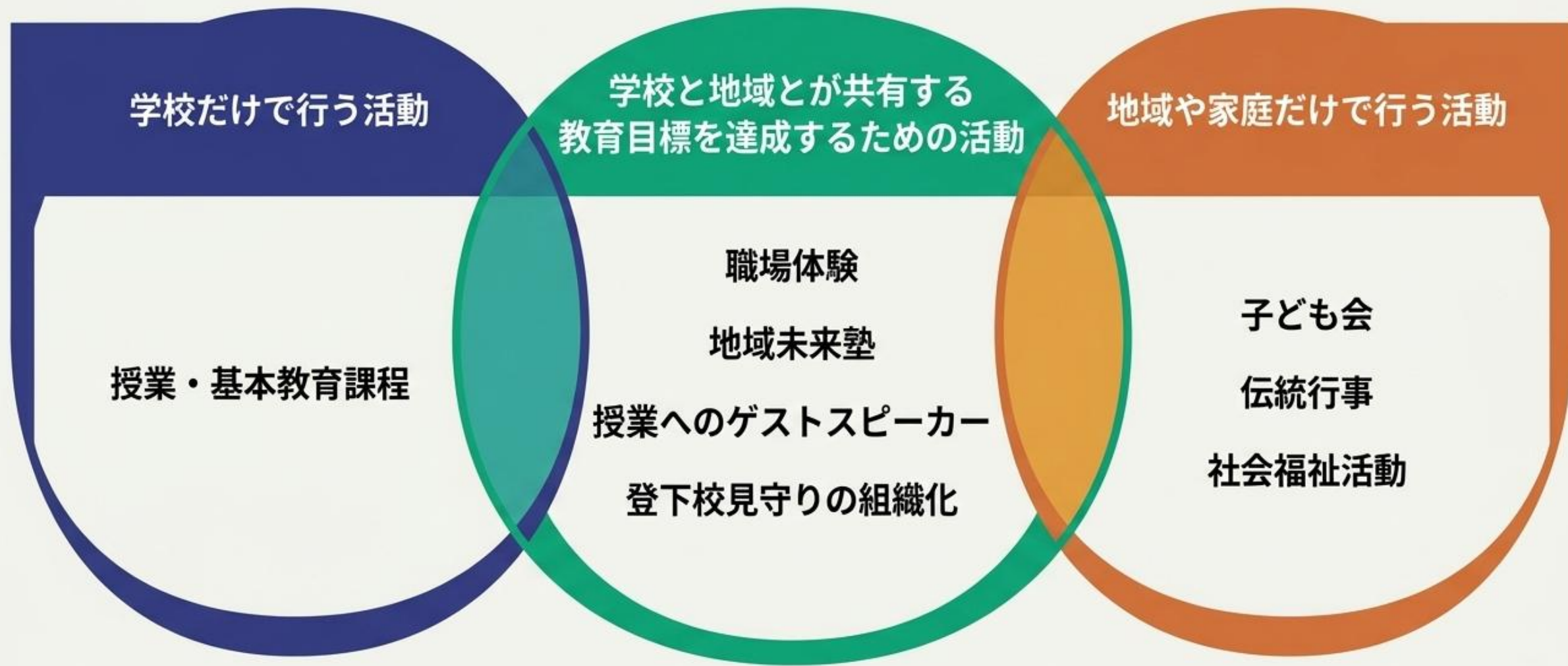


学校運営に地域の人々が「参画」し、共有した目標に向かってともに「協働」する。
この両者が連動して初めて、推進力が生まれます。

前輪（思考）と後輪（行動）の機能的相違

	コミュニティ・スクール（CS）	地域学校協働活動（本部）
主な機能・役割	熟議・ガバナンス（方針承認）	実践・ネットワーク（支援・活動）
根拠法	地教行法第47条の5	社会教育法第9条の7
構成メンバー	任命された委員（代表者）	多様なボランティア・住民
キーパーソン	学校運営協議会 会長 / 校長	地域学校協働推進員
	頭脳・ステアリング（前輪）	手足・エンジン（後輪）

活動を「目標の共有度」で再定義・構造化する



活動が無差別に増やすのではなく、「目標達成のために何を連携・分担するか」を整理することがマネジメントです。

実践例：相互理解から始まる質の高い「熟議」

Step 1: 現状把握



協議会委員が授業参観や校内研修に参加し、教員の取組や子供の様子を直接把握。

Step 2: 振り返りと対話



参観後、教員とともに授業を振り返る時間を設け、学校理解を深める。

Step 3: 建設的な議論



深まった理解を基に、単なる「承認」を超えた、現状の課題を踏まえた実践的な議論（熟議）へと発展させる。

「熟議」とは何か？



【熟慮】

深く考えること

×



【議論】

対等に意見を交わすこと

=

【熟議】

熟議とは、単なる報告会や不満の言い合いではありません。
「どのような子どもを育てていくか」という共有のビジョンに向かって、互いの立場
を理解しながら、納得のいく解決策と行動（役割分担）を導き出すプロセスです。

熟議を成立させる4つの重要視点

事実（現場）に 基づいた議論

（憶測や思い込みではなく、
データや学校・地域のリアルな
現状を出発点とする）

課題や悩みの オープンな共有

（批判を恐れず、学校の抱える
困難や地域のリアルな課題を本
音で自己開示する）

常に「子どものため」 という視点

（すべての議論の帰着点。
大人同士の利害やメンツではなく、
主語を「子ども」にする）

役割分担と振り返り（内省）のセット化

（「誰かがやる」ではなく「自分たちがどう動くか」を決め、後日必ず検証する）

最大の鍵：「一体的推進」とは何か？

CSと地域学校協働活動がバラバラに動くのではなく、連動する仕組み。



1

教育目標を共有したうえで、
地域学校協働活動を実施する。

2

教育目標に基づきながら、学校教育の充実・改善（学校運営協議会）と、社会教育や地域活動の充実・改善（地域学校協働本部など）が同時に協議され、展開される。

3

単に取組を増やすだけでなく、内容や役割の分担・見直し、廃止等についても話し合える関係性。

ステップ② 「当事者性」を持った熟議のサイクル

実行と内省

協議された事項の実行にあたり、学校長が期待される役割を果たし、実施した取組に対して振り返りや内省を行う時間を確保する。



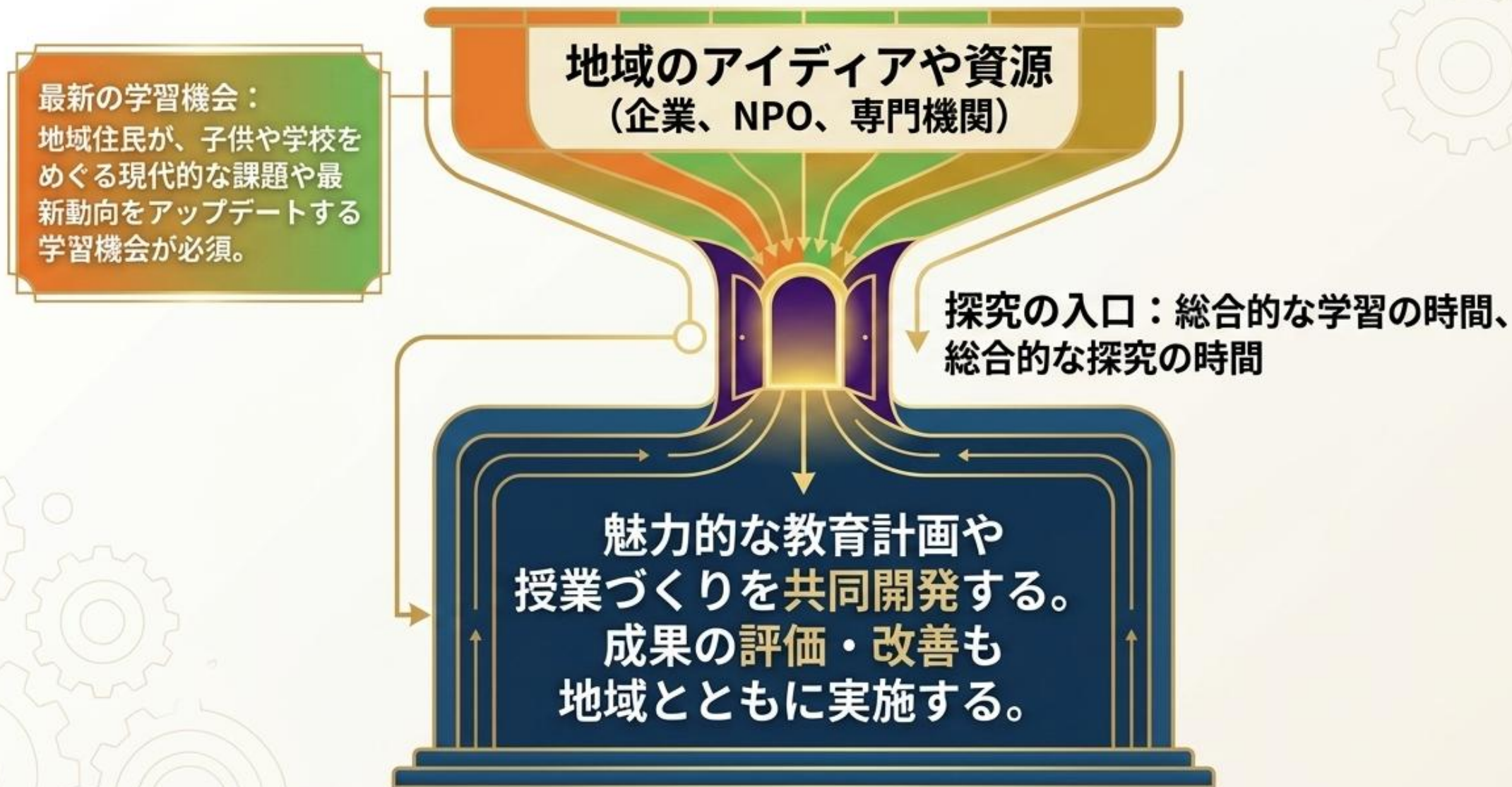
建設的な議論

学校側の提案事項をただ「承認」するだけではなく、より良い学校運営のために建設的に議論を行う。

役割分担の明確化

議論の結果、各主体（学校・保護者・地域の大人等）が実行すべきこと・役割分担を明確にする。

ステップ③ 魅力的な教育計画の開発



まとめ：地域を「お客様」から「当事者」へ

1

「活動」から 「ガバナンス」へ

CSは手伝いの羅列ではなく、目標達成のための意思決定システムである。

2

「熟議」と 「協働」の両輪

学校運営協議会（ビジョン）と地域学校協働活動（実行）を一体的に推進する。

3

持続可能な パートナーシップ

法的根拠に基づく権限を活かし、自立的・対等な立場で継続的に学校をアップデートする。

子供たちのよりよい学びのために、まずは「目指す子ども像」の対話から始めましょう。

一つ目は、みんなで子どもたちを育てることです。

地域の子どもをどう一緒に育てていくのか。それをみんなで考えることができるのがコミュニティ・スクールのいいところです。

子どものためなら力を貸そう、そう考えてくれる地域の人意外と多いものです。子どもを真ん中において考えることは、いろんな意見をぶつかりあってもブレない確かな軸となります。つまり、多様な価値観を受け入れることが大事だということです。



二つ目は、当事者意識を培うということです。

「自分たちは何ができるのか」を考える。それが、自分たちがこの場を作っているという自信と責任感を育て、居場所をつくれます。

コミュニティ・スクールでは、場面ごとに責任者とお手伝いが入れ替わることが重要です。地域の行事では、地域の方が統括し、学校の授業では先生が指導し、地域のお祭りの設営は、中学生が中心に、バザーのイベントでは保護者が活躍、そんな積み重ねが、学校や地域のことを「他人事」ではなく、「自分事」と感じる感覚を育てます。つまり、じっくり、耳を傾けよう、ということです。



三つ目は、
「コミュニティ・スクールをやること」が目的ではなく、
「コミュニティ・スクールを通じて、どういう状態を目指すのか」
を考えることが大切です。

判断に迷ったときには、「これは本当に子どものためだろうか」「自分が指示を出すとスムーズだけど、それは他の方の自主性を高めるだろうか」などと考えると、判断の指標になりますし、しっかりとした目的があると力を合わせられます。



3つの柱を支える土台

「やらねばならない」ではなく、
「コミュニティ・スクールって楽しい」に



コミュニティ・スクールを導入するときは、教育委員会や管理職の義務感からやるのではなく、「うちでもできそうだ」、
「コミュニティ・スクールってよさそう」だから「やりたい」という気持ちから出発することが理想ではないでしょうか。

仕事をスリム化して負担を減らす

今までの仕事に、コミュニティ・スクールの仕事が増えただけでは、大変になるのは当然です。**何が本当に必要な仕事なのか？**を考えて、不要なものは止め、重複が解消するように工夫することが大事です。また**仕事を整理して誰でもできるように**しておけば、個人の負担が減ると思います。

まずは、やってみましょう！

① 問題を発信する

まず情報を出し合い、学校・地域の課題を共有しましょう。うまくいっていないことは、隠したくなりますが、それこそが協働の力ギです。隠さず、情報を出すことで、信頼感を生むきっかけになります。

② 段階的にやる

まずは、1つやってみましょう。
課題解決のための取り組みをみんなで1つやってみることで、学校や地域の課題、持っている資源、合う形などが見えてくると思います。



目指す未来『The Aligned Ecosystem』



いい地域は、いい学校を育てる。いい学校は、いい地域をつくる。

私たちの目的はCSをやることではありません。子どもを真ん中に置き、予測困難な時代を共に生き抜く社会を創ることです。